

外出したくてもできない人の 同行サービスを事業化

— アイデアをじっくり練り、55歳で起業

シニアライフアドバイザー 松本すみ子

ハードな仕事で体を壊す

松下正宏さん（60歳）は、転職の度に畑違いの仕事に就いてきた。美大を出てからアルバイトをしながらか絵を描いていたが、20代半ばで九州にある画材やデザイン用品の会社に就職した。30歳で東京事務所、その後も岡山、福岡と転職を続けた。転職がサラリーマンの出世の条件だった時代だ。



ヘルサボを立ち上げた松下正宏さん

しかし、親も転職が多く、自身も転校が辛かったという経験を持つ。そんな思いをさせたくない、子どもが小学校にあがるのを契機に辞めて、東京に住まいを定めた。それが30代半ば。

東京での再就職先は官公庁関連の専門商社。当時、六本木にあった防衛庁で十数年、国防に関わる仕事を担当した。しかし、月の半分は出張というハードな仕事だ。もともと美術系だったこともあり、畑違いの仕事で徐々にストレスが溜まり、40代半ばには心身ともに壊れた状態になってしまった。

とはいえ、生きるためには働かなければならない。そこで、社会復帰の足がかりとして警備員の仕事に就いた。いわゆる交通整理ではなく、大手警備会社の施設警備だ。300〜400台ほどもあるモニターを一日中監視して、何かあったら警報を鳴らしたり、出勤したりする。

24時間働いて、次の24時間は休

まもなく東京オリンピック・パラリンピックが幕を開ける。国内外から多くの旅行客が訪れるが、その中にはお年寄りもいる。しかし、都会は交通網が複雑で人も多く、戸惑う人が少なくない。東京暮らしが長い自分なら、そんな人たちのサポートができるはずと考えたのが松下正宏さん。仕事の合間にじっくりと構想を練り、新しい着想の事業を開始した。これを土台に新たな展開も生まれている。

みというサイクルで、週3日働く。この仕事では辛いと感じたことはなかった。24時間働くといっても、モニターを監視して、何もなければそれでいい。前の仕事のように自分を脅かす人間はいないし、過度に期待する人間もいない。同僚とは24時間一緒にいるので仲間意識が生まれて楽しく、「ああ、この仕事はいいな」と思いながら働いていた。

起業しない手はない

しかし、50歳になるあたりから、残りの人生をこのまま終わっていいのかと思うようになった。さらに、三つ違いの兄が56歳で病気のために亡くなり、いつまでも生きられないと思っただメなんだなと気づかされた。幸い、息子は間もなく社会人になる。住宅ローン返済の目途もついた。だったら、何かを始めてもいいかもしれない。昔みたいにバリバリではなく、マイペースでできることはないだろ

うか。毎日、そんなことを考えながら、モニターを眺めていた。

せっかく東京に住んでいるんだから、それに関する仕事はないか。「田舎から来る人にとって東京は敷居が高い。まして高齢の方には」という思いが浮かんだ。しかも、東京には観光地も繁華街もイベントもたくさんある。それなのに、団体で来て、バスで回るだけではもったいない。そうした人たちをサポートする代行業のような仕事なら、旅行業の資格がなくてもできるのではないか。資格を取るために、お金や時間をかけるよりは、すぐにできる仕事がいい。

株式会社は1円でも設立できるから、融資を受けなくても済む。また、ネットが発達しているので、昔のように事務所を借りるなどの必要経費や固定費をかけずに始められる。レンタルオフィスなら、月々1万円ほどで十分だ。起業しない手はないと思ひ、調べれば調べるほど楽しくなった。モニター